九つの災害（その 2）　　出エジプト記 8 章 1～31 節

――― 第 2 の災害、蛙 ―――

（1～7 節、読む）6 節「アロンが手をエジプトの水の上に伸ばすと、蛙が這い上がって、エジプトの地をおおった。」

第 2 の災害が起こりました。蛙が群がってエジプトのあらゆる所に広がりエジプト人を悩ましました。しかし、蛙はエジプト人にとって神聖な動物でした。エジプト人の礼拝する偶像の中には、蛙の頭の女神がいました。ヘクトと言いました。

3 節「・・蛙が群がり、這い上がって来て、あなたの家に、寝室に入って、寝台に上り、またあなたの家臣の家に、あなたの民の中に、さらに、あなたのかまど、こね鉢に入り込む。」と書かれているように今、蛙はエジプト中、家の中にも外にも充ち溢れました。とても不気味でいやなのですが神聖な動物ですので、殺すわけにもいけません。困り果てました。

（7 節）「呪法師たちも彼らの秘術を使って、同じように行った。彼らは蛙をエジプトの地の上に這い上がらせた。」エジプトの呪法師たちも、同じことが出来ました。それなりの力を持っていたからです。しかし、蛙を彼らは取り除くことは出来ませんでした。

（8～15 節、読む）ここに至って、ファラオは 8 節「私と私の民のところから蛙を除くように、主に祈れ。そうすれば、私はこの民を去らせる。主にいけにえを献げるがよい。」と言いました。蛙を去らせれば、民を去らせる、と言ったのです。更にファラオは、その日時を「明日」と指示しました。モーセ、アロンは主に祈り（叫び）ました。祈りは神に届きました。蛙は全部死にました。ところが蛙が死ぬと「喉元過ぎれば熱さを忘れる」のことば通り、15 節「ファラオは一息つけると思うと、心を硬くし、彼らの言うことを聞き入れなかった。主が、言われたとおりであった」のです。何も変わりませんでした。

デルフォスの神殿に、次の様な格言があります。「汝みずからを知れ」更に「汝の機会を知れ」。人は自らを省みて、罪人であることを悟らなければなりません。同時に、その機会をとらえて、素直に悔い改めて、神様の救いを求めなければなりません。それなのにファラオは、自らの姿に気が付かず、悔い改める機会を逃してしまったのでした。　残念ですね。

――― 第 3 の災害、ブヨ ―――

（16～19 節、読む）16 節「アロンに言え『あなたの杖を伸ばして、地のちりを打て。そうすれば、ちりはエジプトの全土でブヨとなる』と。」

第 3 の災害が起こりました。ちりが、ブヨになったのです。実はエジプト人には土を拝む風習がありました。その神聖なるちりが、今ブヨとなってエジプトの人々を苦しめています。

（18 節）さて、今までの奇跡は、エジプトの呪法師たちもまねをすることが出来ました。しかし、今回の奇跡は出来ませんでした。同じように神の奇跡のまねをする人は、世に多く

います。しかし、まねごとには必ずその限界があります。悪霊も神の様に奇跡を行うことができます。奇跡を行う宗教はこの世にたくさんあります。（例えば、病気のいやし、など御利益と呼ばれているものです）
（19A 節）「呪法師たちはファラオに『これは神の指（神の業）です』と言った。」ここに来て、とうとう呪法師たちも、これら一連の奇跡が、神の力、神の業であることを認めました。
（19B 節）しかし、残念です。ファラオは心頑なになっていました。「ファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主が言われた通りであった」のでした。今回のブヨの出来事は、ファラオ個人にとってはさほど、他の人々よりは辛いものではなかったようです。残念ですね。またもや彼は悔い改めのチャンスを逃してしまいました。

――― 第 4 の災害、アブ ―――

（20～24 節）21 節「・・もしもわたしの民を去らせないなら、わたしは、あなたと、あなたの家臣と民、そしてあなたの家々にアブの群れを送る。エジプトの家々も、彼らのいる地面も、アブの群れで満ちる。・・」
第 4 の災害が起こりました。24 節「主はその通りにされた。おびただしいアブの群れが、ファラオの家とその家臣の家に入って来た。エジプトの全土にわたり、地はアブの群れによって荒れ果てた。」
さて、今回の災害の特徴は、イスラエルとエジプトとを主がはっきり区別された事でした。

（22、23 節、読む）イスラエルの人々の居住するゴシェンの地では、アブを見ることはなかったのです。神様はイスラエルの人々と、エジプトの人々との間に、一線を引かれました。同じように、神様は救われた者と、罪人との間をも、はっきりと区別なさるお方です。
マラキ書 3：18 節「あなたがたは再び、正しい人と悪しき者、神に仕える者と使えない者の違いを見るようになる。」きっと、ファラオはこのアブの襲来はヘブル人の神の御業であるということを、いやというほど思い知らされた事でしょう。神様は常に光と闇とをはっきりと区別なさる神様なのです。

――― 妥協の勧め その 1、―――

（25～32 節）さてこの時に至って、ファラオは初めて 1 つの妥協案を出しました。25 節「ファラオはモーセとアロンを呼び寄せて言った。『さあ、この国でお前たちの神にいけにえを献げよ。』」
ファラオはここで、こう言っているのです。「あなたたちは何もわざわざ荒野まで行って礼拝をすることはない。神はどこにでもおられるはずだ。だから、この国の中で礼拝を献げなさい。」　でもこれは信仰者にとって大きな危険、妥協です。ファラオは妥協案を持ち出して来たのです。「神を信じている者達よ、そう自分の意見ばかりを通すわけにはいかないだろう。この世の中は持ちつ持たれつなのだから・・・。」

しかし、しかしです、「エジプトを出る事、更に、三日の道のりを行くこと！」、このことは、モーセの考えたことではありません。天地の主なる神様がお示しになられたことなのです。ですから、私たちは従わなければなりません。
ローマ 12：2 節「この世と調子を合わせてはいけません。」
26、27 節「モーセは答えた。『それは、ふさわしいことではありません。・・・私たちは、主が私たちに言われたとおり、荒野へ三日の道のりを行って、私たちの神、主にいけにえを献げなければなりません。』

――― 妥協の勧め、その 2 ―――

でも、ファラオは食い下がります。28 節「・・では、おまえたちを去らせよう。おまえたちは荒野で、おまえたちの神、主にいけにえを献げるがよい。ただ、決して遠くへ行ってはならない。私のために祈ってくれ。」 ここで、ファラオはこの様に言っています。「エジプトの国を出ることは許そう。しかし、すぐ帰って来ることができる所で主に使えなさい。」これも実に甘いことばです。世にはつかず離れずという信者がいます。くすぶり信者です。感謝もなければ ,喜びもない、ただ礼拝もお参りに行くだけなのです。私たちは、この様な人間的な信仰にいつまでもとどまっていてはなりません。私たちは未信者であった古き人から、はっきりと離れなければなりません。今、神様が「肉の都エジプトから離れよ、脱出せよ！」と、モーセを通してイスラエルに語っているように、同じ神様は私たちに対しても「肉の様な自分から離れなさい！」と語られているのです。

モーセに「私のために祈ってくれ」と言っていた、ファラオは、アブがいなくなると、32 節「しかし、ファラオはまたも心を硬くし、民を去らせなかった」のでした。ファラオとの闘いは続きます。

聖書のことば。ローマ 12：2 節「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。」

まさに、出エジプトのメッセージは今、私たちに語られているメッセージなのですね。